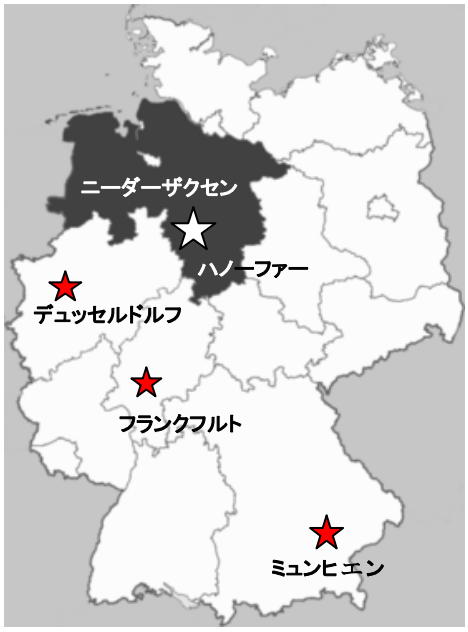
風刺漫画家、ヴィルヘルム・ブッシュ

2018 年 12 月 6 日　岡部由紀子

ヴィルヘルム・ブッシュ　Wilhelm Busch



1832 年、現ニーダーザクセン州（当時ハノーファー王国）にある小村に生まれ、1908 年、ハルツ地方の小村で 75 年の生涯を閉じた。故郷や幼少期を過ごした北部低地ドイツの地で半隠遁の生活を送り、諷刺絵物語や詩、随想を多く発表した。ドイツ語文化圏で、もっとも有名な文化人の一人。
出世作が「マックスとモーリッツ」
表情や動作を的確にとらえる描写と、韻を踏んだリズミカルな文体を得意とした。独善と偽善、まやかしの敬虔さが、しばしば諷刺の対象となった。軽快なタッチで、人間の営みをほろ苦く、かつユーモラスに描き出した風刺漫画は、現代のコミックの源流とみなされている。

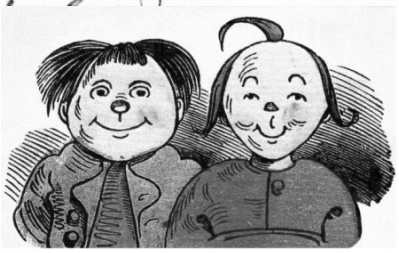
マックスとモーリッツ　Max und Moritz

1854 年、22 才で移り住んだミュンヒェンでの生活費を稼ぐため、「ミュンヒェン一枚絵 Münchner Bilderbogen」や「週刊誌 Fliegende Blätter」に漫画絵物語を執筆していたブッシュが、1865 年にその出版元に持ちこんだ漫画絵本。二人の腕白小僧の七つの悪戯話からなり、軽やかな文体と躍動感のある挿絵が、19 世紀の村で起こる珍事を描き出す。大人達はひどい仕打ちを受けるが、最後には悪戯小僧たちは粉ひき器械に挽かれ穀粒となり、アヒルに食べられてしまう。

当時主流であった子供向けの教訓話とは違い、善なる大人が未発達ゆえ悪である子供を正すという発想はまったくない。大人の硬直した愚かさと、それを揶揄する子供の残酷さ、双方を荒唐無稽の話で諷刺している。出版当初、教育者から非難を浴びたが、青少年を含めた読者の反響は好意的であった。ブッシュの没年には 56 版を数え、430,000 冊の売り上げがあった。現在でも版を重ね、多くの言語やドイツ語方言に翻訳され、誰でも知っているドイツを代表する物語である。

物語の舞台

生家が手狭になったため、9 才でエーバーゲッツェン Ebergötzen で牧師をしていた叔父の家にあずけられ、個人教授を受ける。一緒に学んでいた活発で腕白な粉ひきの息子、エーリッヒ・バッハマン Erich Bachmann がマックスのモデル、華奢で内気だったブッシュはモーリッツのモデル。二人は出会ったその日に意気投合し、自然の中での奔放な遊びに興じた。



泥を体中に塗り乾かす遊び → パン生地に浸かる、パンにくるまれる
パイプに牛の毛を詰める → パイプに火薬をつめる
水車場も遊び場 → 粉にまみれて真っ白になる、粉ひき器械に挽かれる

いたずらの犠牲者のモデル

ニワトリを飼っていたボルテ未亡人、酒好きで変わり者の仕立屋ベック、大きなパン焼き窯を持っていたパン屋のアーノルト、道徳を説くハーゼという名の教師、みなエーバーゲッツェンの村人だった。

「この話に出てくるいたずらを本当にやったのかと聞かれれば、いくつかは真実だと答えよう。悪さは決してよい結末を迎えないということは、まぎれもない真実だ。」ブッシュ

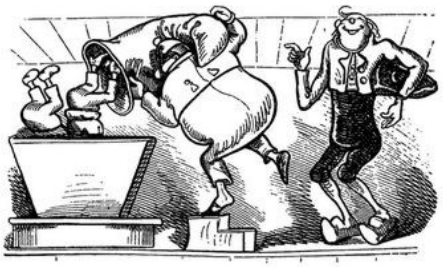
終生続いたエーリッヒとの友情

ブッシュにとって、エーバーゲッツェンの水車場は、終生心の安らぐ場所であり続けた。

「水の流れる音と水車場の器械がゴトゴト稼働する音を子守歌に、ここちよい眠りを楽しんだ。」ブッシュ

水車場は、Wilhelm-Busch-Mühle 博物館（Ebergötzen)として公開されている。

水車場は異空間



水車小屋にまつわる俗信や伝説は多い。

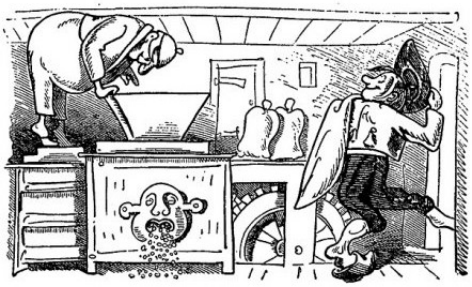
死者の魂は水車小屋のあたりにとどまり、夜、現れて歌う。

水車を回す水は魔力を打ち破る力を持ち、死の病も治すとされた。

粉ひきは水を制御できる特別な異能者として怖れられ、差別された。

水車小屋は村落共同体には属さず、領主から特権を授けられていた。

農民は、領主の管轄下にある水車小屋で粉を挽くことを強制された。



参照：阿部謹也『中世を旅する人々』P. 97-110 『ヨーロッパを読む』P. 91-95

糠吐き男　Kleiekotzer

マックスとモーリッツを、粗挽き小麦として粉ひき器から吐き出す人面

振動で粉を振り落としたあとに残るフスマや糠の出口に、粉ひきが自分で彫った面をつけることがあった。

滑稽な顔や恐ろしげな表情で侵入者を遠ざけたり、悪霊から水車小屋を守ると言われていた。

<u>赤いジャケットを着た男</u>

画業こそ自分の真の仕事だと考えていたブッシュは、彼が暮らした土地の風景や庶民の姿を描き続けた。多くの絵は、本人によって廃棄されたが、没後、千点あまりの油絵と約二千点のスケッチが甥によって公表され、彼の画業が知られることとなった。

画家としての自己否定（16,17 世紀のフランドルの巨匠は超えられない）→ 描いた絵を秘匿しつづけた。

千点の油絵のうち約 180 枚に、赤い上着を着た人物が登場する。うち 70 点は、風景の中の点景。

赤は画竜点睛？

ブッシュの絵の風景の中に登場する人物は、具象的な表現から色を纏う図形へと変化していった。彼の 1890 年頃からの画作では、荒いタッチのさまざまな色で空間や大気を表現している。かつての絵で描かれた赤いジャケットは、赤い色の点へと抽象化されていく。そしてこの赤い点は絵全体の多彩な色彩に焦点を与え、画家や絵を見る者がそこに照準を合わせる効果を生み出している。

赤は、忘れられない思い出？

21 才のときアントワープでチフスにかかったブッシュを、下宿の夫婦が献身的に看病してくれた。病が癒えて故郷へ帰るとき、その夫婦が彼に贈った暖かい赤いジャケットの思い出に繋がっているのかもしれない。当時の農民の上着の色は青か緑で、赤い上着は珍しかった。

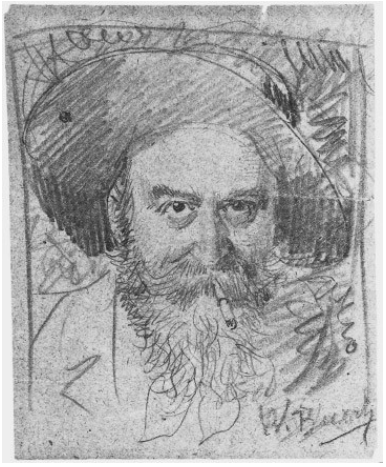
ルーベンスの絵に学んだ？

20 才のとき絵の勉強のため訪れたアントワープで、16～17 世紀のフランドルの巨匠の作品に接し、衝撃を受けた。巨匠の一人であるルーベンスの「夕べの景色」の画中に、荷車を引く馬に乗る赤い上着を着た農夫の後ろ姿が描かれている。この絵に感銘したブッシュが、同じモチーフを発展させた可能性もある。

赤いジャケットの逸話

私は、デュッセルドルフの美術学校からアントワープの絵画学校（王立美術アカデミー）へ移り、ケースブリュッケの角にある床屋に下宿した。亭主はヤン、女房はミーといった。静かな夕方には、私は緑のガウンを着て口に陶器のパイプをくわえて、一緒に店の前に座って過ごした。籠編み職人、時計職人、ブリキ職人、黒塗りの木靴を履いた娘達など、近所の人達もやってきた。ヤンとミーは情が厚く、女房は太り、亭主は痩せていた。交替で私の髪や髭を整え、病気（チフス）になったときは親身に看病してくれた。病が癒えて療養のために故郷へ帰る際には、暖かい赤い上着とオレンジを３個プレゼントしてくれた。数年経ってから、感謝の気持ちを伝えに懐かしい床屋があった町角を訪ねると、すべてが新しくなっていて、ヤンとミーは亡くなっていた。ブリキ職人だけが、狭苦しい仕事場で相変わらずブリキを叩いていた。彼は見知らぬ人を眺めるように、眼鏡の奥から陰鬱な目つきで私を見た。どんなに悲しかったことか。　　„Was mich betrifft“ 1886 年「私に関すること」から抜粋　　和訳: Okabe

ブッシュの言葉



Was man ernst meint, sagt man am besten im Spaß.
　本心は、冗談に包んで明かすのが一番
Dumme Gedanken hat jeder, aber der Weise verschweigt sie.
　ばかばかしいことは誰でも考えているが、賢い者は黙っている
Ausdauer wird früher oder später belohnt – meistens aber später.
　忍耐は遅かれ早かれ報われるー　ほとんどの場合は遅くだが
Die Wahrheit ist zu schlau, um gefangen zu werden.
　真実は、捉えるのには狡猾すぎる　　和訳：Okabe

多くの示唆に富んだ名言を残すが、ほろ苦さと諦念が漂う。
「かくれんぼを得意とする人」の異名をとったブッシュは、本心を明かすことを避け、繊細な感受性で捉えた人間観ををブラック・ユーモアに包んで、軽やかな言葉と風刺画で表現した。
社交的ではなかったが、悲しいほどに人間に惹かれ、鋭い観察眼と嗅覚をもって、その本性に迫ろうとした。